



Title	親密な関係におけるコミットメントのモデルの概観
Author(s)	古村, 健太郎; 松井, 豊
Citation	対人社会心理学研究. 2013, 13, p. 59-70
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/25840">https://doi.org/10.18910/25840</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

# 親密な関係におけるコミットメントのモデルの概観

古村健太郎(筑波大学大学院人間総合科学研究科)

松井 豊(筑波大学人間系)

本稿では、恋愛関係や夫婦関係などの親密な関係におけるコミットメントの定義やモデルを概観した。先行研究におけるコミットメントのモデルの共通点として、関係維持についての動機づけであること、関係の将来についての展望や期待を含むこと、関係維持についての責任感や義務感を含むこと、魅力次元と抑止力次元が存在することの四点が挙げられた。また、相違点として、関係同一性、代替関係の質、関係維持活動をコミットメントそのものとするか、魅力次元と抑止力次元をどのように扱うかが挙げられた。これらの共通点と相違点に基づき、モデルの適切性を議論した。

キーワード:コミットメント、関係維持、親密な関係

本稿の目的は、恋愛・夫婦関係などの親密な関係におけるコミットメントが、どのように定義され、モデル化されているかを概観し、それらの共通点と相違点を議論することである。その後、その議論からモデルの適切性を検討していく。

現在まで、親密な関係の維持の促進因や崩壊の予防因について、数多くの研究がなされてきた。それらのレビューを行った Cate, Levin, & Richmond (2002)やメタ分析を行った Le, Dove, Agnew, Korn, & Mutso (2010)は、コミットメントが関係維持にとって重要な概念であることを指摘した。

コミットメントは、多様な意味合いを持つ概念である。例えば、Fehr(1988)は、アメリカの大学生がコミットメントという用語を、忠誠や責任、誠実さ、信頼など多義的に用いていることを明らかにした。その多義性のためか、コミットメントは関係維持にとって重要な概念であるにも関わらず、その定義やモデルが一意に定まっていない。実際、コミットメントをどのように定義するかは過去 30 年にわたり議論され続けている(e.g., Kelley, 1983; Adams & Jones, 1997; Fincham & Beach, 2010)。研究間で定義が一意に定まらない問題は、研究ごとに構成概念の領域が異なる尺度が開発され、研究間の比較が困難になる問題も引き起こす(Adams & Jones, 1997)。

これらの問題を改善するためにも、コミットメントの理論的分析を行い、コミットメントとは何かについて検討する必要がある(松井, 1998)。そこで、本稿では、先行研究においてコミットメントがどのように定義され、モデル化されてきたのかを概観し、それらの定義やモデルの異同を検討していく。

なお、本稿で扱うコミットメントは、恋愛関係や夫婦関係へのコミットメント(romantic commitment;

marital commitment; relationship commitment)に限定し、組織コミットメントや説得研究のコミットメントなどは扱わない。

## コミットメントの研究の推移

コミットメントの研究の推移を検討するため、査読付きの英語文献と日本語文献の数を確認した。英語文献は、PsycINFO によって、タイトル、キーワード、主題のいずれかに“commit”を含む文献を検索した。この際、“intimacy, romance, dyad, couple, love, pre-marital, social dating, interpersonal interaction, marital, spouse, dissolution, cohabit, interpersonal relationship, divorce, persist, relationship termination”のいずれかが主題に含まれていること、かつ、“work commitment, job commitment, career commitment, organizational commitment, sports commitment, school commitment, acceptance and commitment therapy”が含まれていないことを検索条件とした。検索の結果、500 件の文献が見出された。

一方、日本語文献については、CiNii と J-STAGE によって、“関係関与”、“コミット”、“関係継続”と“恋愛”もしくは“夫婦”を組み合わせて文献を検索した。その結果、31 件の文献が見出された。

コミットメントの研究を年代ごとに整理した図を Figure 1 に示す。英語文献は 1995 年から研究数が急増しており、5 年毎に 100 件以上のペースで文献が増え続けている。なお、1999 年には、*Handbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability*(Adams & Jones, 1999a)が出版され、それまでの研究のまとめが行われている。さらに、2010 年以降も 2 年間で 69 件の論文が公刊されており、研

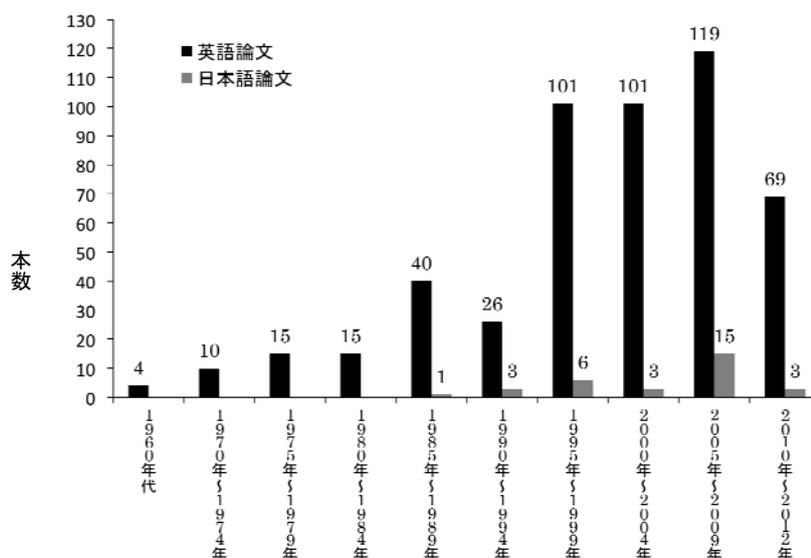


Figure 1 コミットメントを扱った論文の推移

究数は増加の一途を辿っている。

一方、日本語文献は、1990年代に入り、徐々に研究数が増加していった。その内容は、社会的交換のモデル比較が主として行われていた（中村, 1990; 奥田, 1994; 和田・山口, 1999）。また、親密な関係におけるコミットメントではなく、信頼の解き放ち理論(山岸, 1998)に基づくコミットメントの研究(e.g., 清成・山岸, 1996)も行われてきた。

2000年代の研究では、友人関係におけるコミットメントの規定因を検討した相澤(2003)やコミットメントを愛情の一部として扱い、コミットメントが関係内での自己認知に与える影響を検討した金政・大坊(2003)、友人からの拒絶予期とその対処との関連がコミットメントによって媒介されるかを検討した宮崎・池上(2011)、女子青年から見た夫婦のコミットメントを扱った宇都宮(2005)がある。しかし、コミットメントを統制変数として扱う研究(山下・坂田, 2008; 相馬・浦, 2009)などコミットメントをメインテーマとしていないものも多い。

### コミットメントの定義とモデル

コミットメントは多義的な概念であり、様々な定義とモデルが提出されており、それらが一意に定まっていない。そこで、本節では、コミットメントの代表的なモデルとして、投資モデル(Rusbult, 1980, 1983)、愛情の三角理論(Sternberg, 1986)、バリアーモデル(Lund, 1985)、動機づけられた認知アプローチ(Lydon, Burton, & Menzies-Toman, 2005)、三側面モデル(Johnson, 1991, 1999)、次元モデル(Stanley &

Markman, 1992)、接近・回避コミットメント(Strachman & Gable, 2006)を取り上げ、それらのモデルを概観していく。Table 1には定義や構成要素を、Table 2には尺度に含まれる項目例を表記した。

### 投資モデル

投資モデル(Investment Model)は、相互依存性理論(Kelley & Thibaut, 1978)を基盤として、Rusbult(1980, 1983)によって提唱されたモデルである。投資モデルでは、パートナー同士の依存性が高い状態、すなわち個人の得られる成果がパートナーの活動に規定されているほど、コミットメントが強くなるとされる(Rusbult, Olsen, Davis, & Hannon, 2001; Rusbult & Van Lange, 2003)。特に、関係満足度の高さ、代替関係の質の低さ、投資量の大きさが依存性を強め、それによりコミットメントが強められることが明らかになっている(Le & Agnew, 2003)。

投資モデルでは、コミットメントを“長期的志向性と心理的愛着を含む関係継続意思”と定義する。長期的志向性とは、パートナーとの関係が長期間継続していることを想像できたり、関係の将来についての認知的表象が形成されていたりすることである(Arriaga & Agnew, 2001)。心理的愛着とは、パートナーとの感情的なつながりのことである(Arriaga & Agnew, 2001)。

投資モデルに基づくコミットメントの尺度として、Rusbult, Martz, & Agnew (1998)や Arriaga & Agnew (2001)がある。これらの尺度は定義の通り、長期的志向性、心理的愛着、関係継続意思を尋ねる

Table 1 コミットメントの各モデルの定義と要因

モデル名	定義	コミットメントの構成要素						
		次元数	関係維持の動機づけ	関係の将来の展望	パートナーへの責任や義務感	関係同一性	代替関係の質	関係維持活動
投資モデル (Rusbult 1980, 1983)	長期的志向性と心理的愛着を含む関係継続意思	1	○	○	×	○	先行要因	×
愛情の三角理論 (Sternberg, 1986)	短期的には誰かを愛する、長期的には愛を維持する決定や意思	1	○	△	△	×	×	×
バリアーモデル (Lund, 1985)	関係継続可能性の判断、代替関係の回避、関係崩壊時の損失予期	1	×	○	△	×	○	×
動機づけられた認知アプローチ (Lydon et al., 2005)	関係脅威状況に直面した際に関係を維持・保持しようとする動機づけ	1	○	×	△	先行要因	×	×
凝集性モデル (Levinger, 1999)	$\Sigma$ (関係の魅力+関係のバリアー) - $\Sigma$ (代替関係の魅力+代替関係のバリアー)	2	○	△	○	×	○	×
三側面モデル (Johnson, 1991, 1999)	関係の維持と崩壊を決定する動機づけ	3	○	○	○	先行要因	先行要因	×
次元モデル (Stanley & Markman, 1992)	(個人的献身) パートナーとの共同の利益のために関係良好性を維持・改善しようとする欲求 (拘束コミットメント) 個人を関係維持に縛り付ける力	2	○	○	○	○	○	○
接近・回避コミットメント (Strachman & Gable, 2006; Frank & Brandstatter, 2002)	(接近コミットメント) 関係の維持に接近しようとする目標 (回避コミットメント) 関係崩壊を避けようとする目標	2	○	○	○	×	×	×

注) 表中の○は定義や下位概念にその要因が含まれることを表す。△は定義や下位概念には含まれないが尺度項目に含まれるかコミットメントの特徴として指摘されていることを表す。×は定義にも尺度項目にも含まれないことを表す

項目によって構成されている。

### 愛情の三角理論

Sternberg(1986)の愛情の三角理論(Triangular Theory of Love)は、それまでに提出されてきた愛情のモデル(Spearman モデル、Thomsonian モデル、Thurstonian モデル)の比較・検討を通して提唱されたモデルである。愛情の三角理論では、愛情を情熱、親密性、コミットメントを頂点とする三角形で表現する。さらに、この頂点の強弱によって様々な愛情が表現される。

その中で、コミットメントは“短期的には誰かを愛する、長期的には愛を維持する決定や意思”と定義される(Sternberg, 1986)。コミットメントは、関係を維持するか否かの意思決定に関わる認知的要素であり、関係が危機的な状態に陥った場合、その状態の改善を促すことで関係維持に寄与する。つまり、コミットメントは関係継続のための活動を促進しており、この点において動機づけの側面を含意していると考えられる。

愛情の三角理論に基づく尺度としては、Sternberg(1997)やその邦訳版である金政・大坊(2003)がある。これらの尺度は、関係継続に対する責任感、関係の将来の展望、関係継続意思を尋ねる項目によって構成されている。

### バリアーモデル

Lund(1985)のバリアーモデル(Barrier Model)は、関係維持にとって、愛情や報酬といったポジティブな側面の影響力よりも、関係崩壊に関わる終結コストの影響力の方が大きいことを明らかにしたモデルである。

バリアーモデルにおいて、コミットメントは“関係継続可能性の判断、代替関係の回避、関係崩壊時の損失予期”と定義される。この定義は、愛情との弁別性を高めるために、関係維持の願望や動機づけを意図的にコミットメントから取り除いている点に特徴がある。Lund(1985)は、愛情と報酬を合計したポジティブな誘因(positive pull)とコミットメントと投資量を合計したバリアーを説明変数とし、関係の維持・崩壊を目的変数とした判別分析を行った。その結果、バリアーの方が関係崩壊をより予測できることが明らかになった。

バリアーモデルに基づくコミットメント尺度にはLund(1985)やその邦訳版である中村・中田(2002)がある。この尺度は、関係継続可能性、代替関係の回避、関係崩壊時の損失予期、関係継続の責任感を尋ねる項目によって構成されている。

### 動機づけられた認知アプローチ

動機づけられた認知アプローチ (Motivated

-Cognition Approach)は、コミットメントが関係維持に寄与する認知や行動を促す動機づけであることを主張する (Lydon & Linardatos, 2012)。特に、コミットメントと関係脅威状況の関連を検討し、コミットメントの強さと関係脅威状況の強さが均衡している場合に、コミットメントが関係維持活動を促進することを明らかにした(e.g., Lydon, Meana, Sepinwall, Richard, & Mayman, 1999)。

動機づけられた認知アプローチにおいて、コミットメントは“関係脅威状況に直面した際に関係を維持・保持しようとする動機づけ”と定義され (Lydon et al., 2005)、三つの種類があると想定されている(Lydon & Linardatos, 2012)。第一に、関係満足度に基づくコミットメントである。第二に、不安や義務感に基づくコミットメントである。第三に、同一化に基づくコミットメントである。直接的な実証はなされていないが、これらのコミットメントはそれぞれ異なる成果と結びつくと考えられている(Lydon & Linardatos, 2012)。

動機づけられた認知アプローチに基づくコミットメン

ト尺度としては、Gagné & Lydon (2003)がある。この尺度は、関係やパートナーに対する感情的側面(愛着、献身、忠誠、没頭)や投資量を尋ねる項目によって構成されており、三種類のコミットメントを弁別するような尺度にはなっていない。

### 凝集性モデル

凝集性モデル (Cohesiveness Model) は、Levinger(1976, 1999)が、場の理論(Lewin, 1951)を基に、夫婦関係の存続と崩壊を説明しようとした理論である。

凝集性モデルは、パートナーとの関係を二者集団として捉え、そこに生じる魅力とバリアーが関係の維持に影響することを主張している。魅力は、関係から得られる報酬がコストを上回っている場合に生じる、関係をより深化させていこうとする力と定義される。一方、バリアーは、別れることで悪い評価を受けるという不安、別れへの道徳的態度、社会的な圧力などによって生じる関係崩壊を防ぐ力と定義される。さらに、凝集性モデルでは、パートナーとの関係だけではなく、代替関

Table 2 尺度が測定している要因と項目例

モデル名	尺度に含まれる要因と項目の例
投資モデル (Rusbult et al., 1998)	継続意思(私はパートナーとの関係を続けたい) 関係の将来の展望(私は関係の遠い将来にまで目を向けている) 心理的愛着(私とパートナーは感情的につながっている)
愛情の三角理論 (Sternberg, 1997)	* 責任感(私はパートナーへの強い責任感を感じている) * 将来の展望(私とパートナーとの関わりは何ものにも邪魔されない) 継続意思(私はパートナーとの関係を継続するつもりだ <sup>1)</sup> )
バリアーモデル (Lund, 1985)	関係継続可能性の判断(これから6ヶ月経ったとき、あなたとパートナーが一緒にいる見込みはどの程度ありますか) 代替関係の回避(恋人以外の相手と新しい関係を求めることに、あなたはどの程度魅力を感じますか; 逆転項目) 関係崩壊時の損失予期(二人が別れるとしたら、その際にどの程度のトラブルが生じるでしょうか) * 責任感(二人の関係を続けることに対して、あなたはどの程度責任を感じますか)
動機づけられた認知アプローチ (Gagné & Lydon, 2003)	コミットメント、愛着、献身、忠誠、没頭を感じている程度 * どの程度関係に投資していると感じるか
凝集性モデル	なし
三側面モデル (Johnson et al., 1999)	個人的コミットメント(関係を続けたいと感じている程度) 構造的コミットメント(関係をつづけなければならないと感じている程度) モラルコミットメント(関係を続けるべきだと感じている程度)
次元モデル (Stanley & Markman, 1992)	<b>【個人的献身】</b> 関係の計画(私はパートナーと一緒に年を重ねたい) 関係の優先(私とパートナーの関係は私の生活における何にもまして重要だ) 関係同一性(私はパートナーとの関係を“私”や“彼/彼女”よりも“私達”と考えるのが好きだ) 自己犠牲への満足(パートナーのために犠牲になることは、私を良い気分させる) 代替関係のモニタリング(私はパートナー以外の異性に魅力を感じない) メタコミットメント(コミットメントを費くことは、私が私であることの本質の一部である) <b>【抑制コミットメント】</b> 構造的投資(私はパートナーとの関係にあまりお金を費やしていない; 逆転項目) 社会的圧力(友人は私達の関係が継続するのを見たがっている) 別れの面倒さ(パートナーに別れを伝えることがどの程度面倒か) パートナーの利用可能性(新しいパートナーを見つけるのは非常に難しい) 魅力的ではない代替関係(一人で住むことがどの程度幸せか) 別れへの道徳的態度(離婚は間違っている)

注) \*がついているものは定義には含まれないが、尺度項目には含まれているものを示す。

1) Sternberg (1997)では項目に含まれるが、金政・大坊(2003)では項目から除外されている。

係の魅力とバリアーもコミットメントに影響するとしている。以上から、Levinger(1991)はコミットメントを、

$$\Sigma(\text{関係の魅力} - \text{関係のバリアー}) - \Sigma(\text{代替関係の魅力} - \text{代替関係のバリアー})$$

と定義している。凝集性モデルに基づく尺度は作成されていない。

### 三側面モデル

三側面モデル(Tripartite Model)は、人々がコミットメントをどのように体験するかという現象学的アプローチに基づくモデルである(Johnson, 1991)。

三側面モデルは、コミットメントを“関係の維持・崩壊を決定する動機づけ”と定義する。この動機づけは三種類のコミットメントとして体験される。第一は、個人的コミットメントである。個人的コミットメントは、パートナーやパートナーとの関係の魅力、関係同一性によって強められる、関係を続けたいと感じるコミットメントであり、want to コミットメントとも呼ばれる。なお、関係同一性とは、パートナーとの関係が自己概念と結びついていることと定義される(Johnson, 1991)。第二は、構造的コミットメントである。構造的コミットメントは、魅力的な代替関係が存在しないこと、関係が崩壊することで価値を失う投資をしていること、社会的ネットワークからの圧力、別れの面倒さによって強められる、関係を続けなければならないと感じるコミットメントであり、have to コミットメントとも呼ばれる。第三は、モラルコミットメントである。モラルコミットメントは、夫婦関係など特定の関係は継続すべきだという信念、関係維持に対する責任感、一度はじめてことはやり遂げなければならないという価値観によって強められる、関係を続けるべきだと感じるコミットメントであり、ought to コミットメントとも呼ばれる。

三側面モデルに基づく尺度には、Adams & Jones(1997)や、それぞれのコミットメントを各 1 項目ずつで尋ねる Johnson, Caughlin, & Huston(1999)がある。

### 次元モデル

次元モデル<sup>1)</sup>は Stanley & Markman(1992)が提案したモデルである。次元モデルは、コミットメントを個人的献身と拘束コミットメントの二次元に分類する。個人的献身は、“パートナーとの共同の利益のために関係良好性を維持・改善しようとする欲求”と定義される。拘束コミットメントは、“個人を関係維持に縛り付ける力”と定義される。

個人的献身と拘束コミットメントは、それぞれ 6 つの下位概念によって構成されている。個人的献身は、“関係の計画(relationship agenda)”、“関係の優

先”、“関係同一性”、“自己犠牲への満足”、“代替関係のモニタリング”、“メタコミットメント”によって構成されている。一方、拘束コミットメントは、“構造的投資”、“社会的圧力”、“別れの面倒さ”、“魅力的ではない代替関係”、“パートナーの利用可能性”、“別れへの道徳的態度”によって構成されている。

Stanley & Markman(1992)は夫婦を主たる対象としているが、Owen, Rhoades, Stanley, & Markman(2011) や Rhoades, Stanley, & Markman(2010)は、次元モデルを恋愛関係に適用している。その結果、個人的献身は一次元構造であり、拘束コミットメントは、“構造的投資”、“金銭的な代替関係の不足”、“パートナーの福利への関心”、“社会的圧力”、“代替関係の利用可能性”、“別れの面倒さ”によって構成されていた。次元モデルに基づく尺度には、Stanley & Markman(1992)や Owen et al. (2011)がある。

### 接近・回避コミットメント

接近・回避コミットメント(Approach-Avoidance Commitment)は、コミットメントを関係維持についての目標として捉え、その基本的分類である接近次元と回避次元によって分類したモデルである。目標とは、“評価、感情、行動に影響を与える望ましい最終状態についての認知的表象”のことである(Fishbach & Ferguson, 2007)。望ましい最終状態には、接近すべき最終状態と回避すべき最終状態がある(e.g., Higgins, 1998)。関係維持についての目標といった場合、接近すべき最終状態は関係維持、回避すべき最終状態は関係崩壊と考えられる。したがって、接近コミットメントは関係維持に接近しようとする目標であり、回避コミットメントは関係崩壊を避けようとする目標である。

接近コミットメントは関係満足度やパートナーとの類似性など関係継続によって得られる報酬と、回避コミットメントは投資量や交際期間など関係崩壊と関連する罰や終結コストと関連する(Frank & Brandstätter, 2002)。また、関係維持についての義務感が回避コミットメントに含まれることも指摘されている(Frank & Brandstätter, 2002)。このモデルに基づく尺度は Frank & Brandstätter(2002)によって作成されているが、内容的妥当性の問題が指摘されている(Strachman & Gable, 2006)。

### 各モデルの共通点

ここまで、コミットメントの代表的なモデルについて概観してきた。以下では、多くのモデルに共通する四点に着目し、議論する。

## 第一の共通点: 関係維持についての動機づけである

各モデルの第一の共通点は、コミットメントを“関係維持についての動機づけ”として捉えている点である (e.g., Ogolsky, 2009)。動機づけられた認知アプローチや三側面モデル、次元モデル、接近・回避コミットメントは、定義において直接的に動機づけに言及している。また、投資モデルの定義における関係継続意思とは、関係継続への動機づけと同じ内容である (Arriaga & Agnew, 2001)。愛情の三角理論では、愛を維持しようとする意思と定義し、コミットメントを関係維持についての意思決定に関わるものとした (Sternberg, 1986)。さらに愛情の三角理論尺度 (Sternberg, 1997) の項目では、“私はパートナーとの関係を維持するつもりだ”など関係継続の動機づけを尋ねる項目がある。これらから、愛情の三角理論の定義も関係維持についての動機づけに言及している。

一方、バリアーモデルは、コミットメントに関係維持についての動機づけを含めていない。バリアーモデルは、愛情との弁別性を高めるために、コミットメントに動機づけを含めない方が良いと主張している (Lund, 1985)。

以上から、バリアーモデル以外の各モデルにおいて、コミットメントが“関係維持についての動機づけ”と捉えられている点で共通していた。

## 第二の共通点: 関係の将来に対する展望や期待を含む

第二の共通点は、“関係の将来に対する展望や期待”を含むことである (Surra, Hughe, & Jacquet, 1999)。投資モデルは、長期的志向性がコミットメントに含まれると定義をしている。また、愛情の三角理論では、定義で明言されていないが、尺度項目には“私と〇〇さんの関係は揺るぎないものである”など、パートナーとの将来について尋ねる項目が存在している。バリアーモデルでは、関係の将来に対する展望である関係の存続可能性や関係崩壊時の損失予期が定義に含まれている。凝集性モデルでは、定義で明言されていないが、コミットメントが強くなることで二者の将来についての関心が生じていくことが指摘されている (Levinger, 1999)。したがって、直接的ではないが、凝集性モデルも関係の将来に対する展望をコミットメントとして扱っていると考えられる。次元モデルでは、コミットメントの下位概念として関係の将来に対する展望や期待が設定されている。接近・回避コミットメントは、将来関係から得られると予測される報酬へ接近したり、将来生じる可能性がある罰から回避したりするコ

ミットメントであることから、関係の将来についての展望や期待を含むと考えられる。

一方、動機づけられた認知アプローチは、コミットメントを動機づけとしており、関係の将来に対する展望や期待を含んでいない。また、尺度項目についても、パートナーや関係への感情的側面を尋ねているのみであり、関係の将来に対する展望や期待については言及していない。

以上から、動機づけられた認知アプローチは将来の展望について言及していないが、それ以外のモデルは関係の将来についての展望や期待を含む点で共通していた。

## 第三の共通点: 関係維持に対する責任感や義務感を含む

第三の共通点は、関係維持に対する責任感や義務感を含むことである。三側面モデルは、モラルコミットメントとして責任感や義務感を扱っており、次元モデルは別れに対する義務感を下位概念として扱っている。凝集性モデルや接近・回避コミットメントでは、関係維持に対する責任感や義務感が、それぞれバリアーや回避コミットメントの一部であるとされる。また、愛情の三角理論やバリアーモデルでは、定義で明示されていないが、尺度には、どのくらい関係維持に責任を感じているかを尋ねる項目が存在している。

一方、投資モデルについては、Cox, Wexler, Rusbult, Gaines(1997)が、友人からの期待によって生じる関係維持に対する責任感や義務感がコミットメントの先行要因となりうる可能性を示唆しているものの、定義や尺度項目に関係維持に対する責任感や義務感が含まれていない。

以上から、投資モデル以外のモデルは、関係維持についての責任感や義務感を含んでいる点で共通していた。

## 第四の共通点: 魅力次元と抑止力次元が存在する

第四の共通点は、コミットメントに魅力次元 (attraction) と抑止力次元 (constraint) という性質の異なる二つの次元が存在することである (Adams & Jones, 1999b)。魅力次元とは、関係満足度や愛情の強さと関連する、自発的に関係を継続しようとする次元である。一方、抑止力次元とは、終結コストの高まりによって関係から離れられなくなる次元である。

Adams & Jones(1999b)や Cate et al. (2001)は、各モデルと魅力次元、抑止力次元の対応について以下のように述べている。投資モデルでは、コミットメントの先行要因である関係満足度が魅力次元に、代替関係の質と投資量が抑止力次元に対応する。愛情の三

角理論におけるコミットメントは、魅力次元に対応する。バリアーモデルのコミットメントは抑止力次元に対応する。三側面モデルでは、個人的コミットメントが魅力次元に、構造的コミットメントが抑止力次元に対応する<sup>2)</sup>。凝集性モデルでは、関係の魅力が魅力次元、バリアーが抑止力次元に対応する。次元モデルは、個人的献身在魅力次元に、拘束コミットメントが抑止力次元に対応する。

さらに、Adams & Jones(1999b)や Cate et al. (2001)では触れられてはいないが、動機づけられた認知アプローチにおける、関係満足度に基づくコミットメントや関係同一性に基づくコミットメントは魅力次元に、不安や義務に基づくコミットメントは抑止力次元に対応し、接近・回避コミットメントにおける接近コミットメントは魅力次元に、回避コミットメントは抑止力次元に対応すると考えられる。

以上から、愛情の三角理論では魅力次元のみ、バリアーモデルでは抑止力次元のみが扱われているが、それ以外のモデルでは魅力次元と抑止力次元の両方が扱われている点が共通していた。

### 各モデルの相違点

前節では各モデルの共通点を検討し、4つの共通点があることを指摘した。その一方で、各モデル間の相違点として、どの要因をコミットメントそのものとし、どの要因を先行要因とするかが異なると指摘されている(Surra et al., 1999)。また、共通点で指摘した魅力次元と抑止力次元をどのように扱うかについても各モデルで相違が見られる。以降では、これらの相違点に触れていく。

#### 何がコミットメントそのもので、何が先行要因か

どの要因をコミットメントそのものとし、どの要因を先行要因とするかについて、各モデル間で三つの要因に違いが見られた。第一に、関係同一性は、投資モデルや次元モデルにおいてコミットメントそのものとされるのに対して、動機づけられた認知アプローチや三側面モデルにおいては、コミットメントの先行要因と捉えられていた(Table 1の関係同一性の列を参照)。一方、愛情の三角理論、バリアーモデル、凝集性モデル、接近・回避コミットメントにおいて、関係同一性はコミットメントの要因に含まれなかった。

第二に、代替関係の質は、バリアーモデルと凝集性モデル、次元モデルではコミットメントそのものとされ、投資モデルと三側面モデルでは先行要因とされていた(Table 1の代替関係の質の列を参照)。一方、愛情の三角理論や動機づけられた認知アプローチ、接近・回避コミットメントにおいて、代替関係の質はコミッ

トメントの要因に含まれなかった。

第三に、“自己犠牲への満足”や“代替関係のモニタリング”といった関係維持活動は、次元モデルではコミットメントそのものとされたが、それ以外のモデルではコミットメントの要因に含まれなかった(Table 1の関係維持活動の列を参照)。

#### 魅力次元と抑止力次元の扱い方

魅力次元と抑止力次元の扱い方や測定の仕方には大きく二つの種類があることを Cate et al. (2002)や Givertz & Segrin(2005)が論じている。

第一は、全体的コミットメント(global commitment; general commitment)である。全体的コミットメントは、コミットメントを魅力次元と抑止力次元を集約した一次元構造として扱うモデル群である。例えば、投資モデルは、魅力次元に対応する関係満足度、抑止力次元に対応する代替関係の質と投資量を一次元を集約したものをコミットメントとしている。また、動機づけられた認知アプローチは、三種類のコミットメントを想定しながら、実際には一次元構造のものとして扱っている。他にも、愛情の三角理論、バリアーモデルは、コミットメントを一次元構造として扱っていることから、全体的コミットメントであると考えられる。なお、全体的コミットメントの測定は、単一項目(例えば、“私は関係の維持に関与(commit)していると感じる”など)が用いられることもある。

第二は、魅力次元と抑止力次元を独立した次元として扱うモデル群である。本稿では、このモデルを次元的コミットメントと呼ぶこととする。例えば、三側面モデルは個人的コミットメント、構造的コミットメント、モラルコミットメントを集約せず、それぞれを独立したものとして扱っている。次元的コミットメントとしては三側面モデルの他に、凝集性モデル、次元モデルがある(Givertz & Seglin, 2005)。また、接近・回避コミットメントも次元的コミットメントに分類できる。

### モデルの適切性判断

前節では、各モデルの相違点を指摘した。以下では、これらの相違点について整理し、モデルの適切性を議論する。

#### 関係同一性、代替関係の質、関係維持活動の相違点の整理

第一の相違点として、関係同一性、代替関係の質、関係維持活動をコミットメントそのものとするか、先行要因とするかが異なっていたことを指摘した。これらの要因はどのように扱えばよいのであろうか。

まず、関係同一性は、コミットメントとは独立した概念であると考えられる。Linardatos & Lydon(2011)や

Gagné & Lydon(2003)は、関係同一性とコミットメントが関係維持活動をそれぞれ独立して予測すること、コミットメントと関係維持活動の関連が関係同一性によって調整されることを明らかにしている。さらに、Agnew, Van Lange, Rusbult, & Langston(1998)は、コミットメントと関係同一性が互いを強め合う双方向的な関係であることを明らかにしている。これらの結果は、関係同一性が関係維持に対して、コミットメントとは独立した異なる影響を与えることを示唆している。これより、関係同一性は、コミットメントそのものではないとするのが適切と考えられる。

また、代替関係の質も、コミットメントそのものではないと考えられる。代替関係の質とは、自分の重要な欲求がパートナー以外の関係で満たされている程度(Rusbult et al., 1998)や、パートナーとの関係の代わりになるものに対する評価(Johnson, 1991)とされる<sup>3)</sup>。代替関係の質は、関係への依存を強め、終結コストを高めることでコミットメントを強める(Kelley & Thibaut, 1978)。したがって、コミットメントそのものではなく、コミットメントの先行要因と考えられる。

さらに、関係維持活動は、コミットメントそのものでも先行要因でもないと考えられる。次元モデルにおいて、コミットメントそのものとされている“代替関係のモニタリング”や“犠牲への満足”は、それぞれ代替選択肢の切り下げ(e.g., Johnson & Rusbult, 1989; Lydon et al., 1999)、自己犠牲(e.g., Mattingly & Clark, 2010; Van Lange, Rusbult, Drigotas, Arriaga, Witcher, & Cox, 1997)として検討されてきた関係維持活動と同様の内容である。これらの関係維持活動は、コミットメントによって促進されることが明らかになっている(e.g., Wieselquist, Rusbult, Agnew, & Foster, 1999)。そのため、関係維持活動はコミットメントそのものではないと考えられる。

以上の議論から、関係同一性、代替関係の質、関係維持活動をコミットメントそのものとして含まないモデルが適切と考えられる。

### 全体的コミットメントと次元的コミットメントの整理

全体的コミットメントと次元的コミットメントを比較すると、以下の二つの理由から次元的コミットメントの方がより詳細に親密な関係の維持について検討できる可能性がある。

第一に、全体的コミットメントが魅力次元に偏った測定をしている可能性があるためである。全体的コミットメントの尺度は、愛情や関係満足度と高い相関を示すことから(e.g., Rusbult et al., 1998; Sternberg, 1997)、魅力次元に偏った測定をしている可能性がある(Johnson, 1999)。実際、Hendrick & Hen-

drick(1989)や Kurdek(1996)は、愛情の三角理論尺度のコミットメントと他の関係性評価の尺度について二次因子分析を行い、コミットメントが関係満足度、親密性、ラブスタイルのエロスやマニアと同じ因子にまとまることを明らかにした。これらの結果は、コミットメントの測定が魅力次元に偏っていることを示唆するものである。

このように全体的コミットメントは、魅力次元と抑止力次元の存在を想定しながら、魅力次元に偏った測定をしているため、構成概念的妥当性の問題を有している可能性もある(Johnson, 1999; Cate et al., 2002)。

第二の理由は、次元的コミットメントは二つの次元を独立させて測定するため、それぞれの次元が関係維持に異なる影響を与えることを明確に検討できるためである。例えば、Rolloff, Souel, & Carey(2001)は、コミットメントの魅力次元と抑止力次元が、恋人との葛藤時の行動とどのように関連するかを検討した。その結果、魅力次元が強い人はパートナーの視点に立ったり、関係修復を試したりすることで葛藤に対処していた。一方、抑止力次元の強い人は、復讐することを思い浮かべたり、友人への相談をしたり、パートナーを無視したりすることで、葛藤に対処していた。また、Lydon, Pierce, & O'Regan (1997)は、遠距離恋愛をしている大学生を対象とした縦断調査において、モラルコミットメントが関係維持を予測するのに対して、コミットメントの魅力次元が関係維持を予測しないことを報告した。さらに、モラルコミットメントが強い人ほど、自分たちの関係を意味のあるものとして捉えることや、投資量が増加することも報告している。Rolloff et al. (2001)や Lydon et al. (1997)の結果は、魅力次元と抑止力次元とが関係維持に異なる影響を持つことを示すものである。

以上の二つの理由から、次元的コミットメントは全体的コミットメントよりも親密な関係がどのように維持されているのかを詳細に検討できる可能性がある。したがって、次元的コミットメントを採用しているモデル群の方が適切と考えられる。

### 結論

ここまで、コミットメントの定義やモデルを概観し、共通点と相違点を指摘した。共通点として、関係維持についての動機づけであること、関係の将来についての展望や期待を含むこと、関係維持についての責任や義務感を含むこと、魅力次元と抑止力次元を含むことが挙げられた。また、相違点として、関係同一性、代替関係の質、関係維持活動をコミットメントそのものと

するか否かが異なること、魅力次元と抑止力次元の扱い方には全体的コミットメントと次元的コミットメントが存在することが挙げられた。相違点については、関係同一性、代替関係の質、関係維持活動をコミットメントそのものとしなない方が良いこと、次元的コミットメントの方が全体的コミットメントよりも詳細に親密な関係の維持を検討できる可能性があることが指摘された。

本稿では、コミットメントの定義を収束させるための一つの方法として、四つの共通点をいずれも含んでおり、関係同一性、代替関係の質、関係維持活動をコミットメントそのものとしなない、次元モデルを採用している定義やモデルを採択することを提案する。この基準に従えば、採用されるモデルは、三側面モデルもしくは接近・回避コミットメントとなる。今後、これらのモデルの枠組みを用いて親密な関係の維持を検討していくことで、日本における親密な関係の研究がより発展していくと考えられる。

また、近年、社会問題としてデートDVが注目され続けている。内閣府男女共同参画局(2012)は、デートDVが生じているにも関わらず、「相手の反応が怖かったから」や「世間体が悪いと思ったから」などの理由で、その相手と別れなかった人がいることを報告している。この理由は、三側面モデルの構造的コミットメント、接近・回避コミットメントの回避コミットメントに対応する。構造的コミットメントや回避コミットメントを理由として関係が続いている場合、そこに介入することでデートDVが生じているような不適応的な関係を終結させられる可能性がある。したがって、三側面モデルや接近・回避コミットメントの枠組みは、デートDVのような親密な関係に関する社会問題を捉える有効な視点となる可能性がある。

しかし、欧米で行われたコミットメントの研究を、日本にそのまま適用できるかについては慎重に検討していく必要がある。それは、日本にコミットメントと一対一で対応する語が存在しないためである。そのため、欧米でコミットメントとして捉えられる現象が、日本では全く別の概念で説明される可能性は否定できない。実際、Ballard-Reisch, Weigel, & Zaguidouline (1999)は、コミットメントと同義の語が存在しないロシアにおいて、欧米ではコミットメントと関連するとされた行動が、別な概念(例えば、社会的規範)で説明されていたことを見出している。日本においても同様の現象が見られる可能性は高いと考えられる。したがって、三側面モデルや接近・回避コミットメントの理論的な枠組みを採用しながら、日本における親密な関係の維持に適用できる部分と、適用できない部分を詳細に検討していくことが望まれる。

## 引用文献

- Adams, J. M., & Jones, W. H. (1997). The conceptualization of marital commitment: An integrative analysis. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1177-1196.
- Adams, J. M., & Jones, W. H. (1999a). Handbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability. Pleum New York.
- Adams, J. M., & Jones, W. H. (1999b). Interpersonal commitment in historical perspective. In J. M. Adams, & W. H. Jones (Eds.), *Handbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability*. New York: Pleum. pp. 3-33.
- Agnew, C. R., Van Lange, P. A. M., Rusbult, C. E., & Langston, C. A. (1998). Cognitive interdependence: Commitment and the mental representation of close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **74**, 939-954.
- 相澤寛史 (2003). 同性友人関係における投資モデルの精緻化 実験社会心理学研究, **42**, 131-145.
- Arriaga, X. B., & Agnew, C. R. (2001). Being committed: Affective, cognitive, and conative components of relationship commitment. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **27**, 1190-1203.
- Ballard-Reisch, D. S., Weigel, D. J. & Zaguidouline, M. G. (1999). Relational maintenance behavior, marital satisfaction and commitment in Tatar, Russian and mixed Russian/Tatar marriages: An Exploratory analysis. *Journal of Family Issues*, **30**, 677-697.
- Cate, R. M., Levin, C. L., & Richmond, L. S. (2002). Premarital relationship stability: A review of recent research. *Journal of Social and Personal Relationships*, **19**, 261-284.
- Cox, C. L., Wexler, M. O., Rusbult, C. E., & Gaines Jr, S. O. (1997). Prescriptive support and commitment processes in close relationships. *Social Psychology Quarterly*, **60**, 79-90.
- Fehr, B. (1988). Prototype analysis of the concepts of love and commitment. *Journal of Personality and Social Psychology*, **55**, 557-579.
- Fincham, F. D., & Beach, S. R. H. (2010). Of memes and marriage: Toward a positive relationship science. *Journal of Family Theory and Review*, **2**, 4-24.
- Fishbach, A., & Ferguson, M. J. (2007). The goal construct in social psychology. In A. W. Kruglanski, & E. T. Higgins (Eds.), *Social Psychology Handbook of Basic Principles*. New York: Guilford Press. pp. 490-515.
- Frank, E., & Brandstätter, V. (2002). Approach versus avoidance: Different type of commitment in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **82**, 208-221.
- Gagné, F. M., & Lydon, J. E. (2003). Identification and the commitment shift: Accounting for gender differences in relationship illusions. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **29**, 907-919.

- Givertz, M. & Segrin, C. (2005). Explaining personal and constraint commitment in close relationship: the role of satisfaction, conflict responses, and relational bond. *Journal of Social and Personal Relationships*, **22**, 757-775.
- Hendrick, C., & Hendrick, S. S. (1989). Research on love: Does it measure up? *Journal of Personality and Social Psychology*, **56**, 784-794.
- Higgins, E. T. (1998). Promotion and prevention: Regulatory focus as a motivational principle. *Advances in Experimental Social Psychology*, **30**, 1-46.
- Johnson, D. J., & Rusbult, C. E. (1989). Resisting temptation: Devaluation of alternative partners as a means of maintaining commitment in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 967-980.
- Johnson, M. P. (1991). Commitment to personal relationships. In W. H. Jones, & D. Perlman (Eds.), *Advances in Personal Relationships*. Vol. 3. London: J. Kingsley. pp. 117-143. □
- Johnson, M. P. (1999). Personal, moral, and structural commitment to relationships – experiences of choice and constraint – In J. M. Adams, & W. H. Jones (Eds.), *Handbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability*. New York: Plenum. pp. 73-84.
- Johnson, M. P., Caughlin, J. P., & Huston, T. L. (1999). The tripartite nature of marital commitment: Personal, moral, and structural reasons to stay married. *Journal of Marriage and the Family*, **61**, 160-177.
- 金政祐司・大坊郁夫 (2003). 愛情の三角理論における3つの要素と親密な異性関係 感情心理学研究, **10**, 11-24.
- Kelley, H. H. & Thibaut, J. H. (1978). *Interpersonal relations: A theory of interdependence*. Wiley-interscience. (黒川正流(監訳) (1995). 対人関係論 誠信書房).
- Kelley, H. H. (1983). Love and commitment. In H. H. Kelley, E. Berscheid, A. Christensen, J. H. Harvey, T. L. Huston, G. Levinger, E. McClintock, L. A. Peplau, & D. R. Peterson (Eds.), *Close Relationships*. New York: Freeman. pp. 265-314.
- 清成透子・山岸俊男 (1996). コミットメント形成による部外者に対する信頼の低下 実験社会心理学研究, **36**, 33-42.
- Kurdek, L. A. (1996). The deterioration of relationship quality for gay and lesbian cohabiting couples: A five-year prospective longitudinal study. *Personal Relationships*, **3**, 417-442
- Le, B., & Agnew, C. R. (2003). Commitment and its theorized determinants: A meta-analysis of the investment model. *Personal Relationships*, **10**, 37-57.
- Le, B., Dove, N. L., Agnew, C. R., Korn, M. S., & Mutso, A. A. (2010). Predicting nonmarital romantic relationship dissolution: A meta-analytic synthesis. *Personal Relationships*, **17**, 377-390.
- Levinger, G. (1976). A social psychological perspective on marital dissolution. *Journal of Social Issues*, **32**, 21-47.
- Levinger, G. (1991). Commitment vs. cohesiveness: Two complementary perspectives. In W. H. Jones, & D. Perlman (Eds.), *Advanced in Personal Relationships*. Vol. 3. London: J. Kingsley. pp. 145-150.
- Levinger, G. (1999). Duty toward whom? reconsidering attractions and barriers as determinants of commitment in a relationship. In J. M. Adams, & W. H. Jones (Eds.), *Handbook of Interpersonal Commitment and Relationship Stability*. New York: Plenum. pp. 37-52.
- Lewin, K. (1951). *Field theory in social science*. New York: Harper.
- Linardatos, L., & Lydon, J. E. (2011). Relationship-specific identification and spontaneous relationship maintenance processes. *Journal of Personality and Social Psychology*, **101**, 737-753.
- Lund, M. (1985). The development of investment and commitment scales for predicting continuity of personal relationships. *Journal of Social and Personal Relationships*, **2**, 3-23.
- Lydon, J. E., & Linardatos, L. (2012). Identification: The why of relationship commitment. In L. Campbell, J. G. L. Guardia, J. M. Olson, & M. P. Zanna (Eds.), *The Science of The Couple: The Ontario Symposium*. New York: Psychological Press. pp. 119-140.
- Lydon, J. E., Pierce, T., & O'Regan, S. (1997). Coping with moral commitment to long-distance dating relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **73**, 104-113.
- Lydon, J. E., Meana, M., Sepinwall, D., Richards, N., & Mayman, S. (1999). The commitment calibration hypothesis: When do people devalue attractive alternative. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **25**, 152-161.
- Lydon, J. E., Burton, K., & Menzies-Toman, D. (2005). Commitment calibration with the relationship cognition toolbox. In M. W. Baldwin (Ed.), *Interpersonal Cognition*. New York: Guilford Press. pp. 126-152.
- Mattingly, B. A. & Clark, E. M. (2010). The role of activity importance and commitment on willingness to sacrifice. *North American Journal of Psychology*, **12**, 51-66.
- 松井 豊 (1998). 恋愛における性差 松井豊 (編) 現代のエスプリ368 –データは恋愛をどこまで解明したのか–至文堂 pp. 113-121.
- 宮崎弦太・池上知子 (2011). 社会的拒絶への対処行動を規定する関係要因–関係相手からの受容予期と関係へのコミットメント–実験社会心理学研究, **50**, 194-204.
- 内閣府男女共同参画局(2012). 男女間における暴力に関する調査報告書, 内閣府.
- 中村雅彦 (1990). 大学生の友人関係の発展過程に関する研究–関係関与性を予測する社会的交換モデルの比較検討– 社会心理学研究, **5**, 29-41.

- 中村雅彦・中田文 (2002). 恋愛相互作用がカップルの関係関与性に及ぼす影響 愛媛大学教育学部紀要 (第 I 部教育科学), **49**, 103-117.
- Ogolsky, B. G. (2009). Deconstructing the association between relationship maintenance and commitment: Testing two competing models. *Personal Relationships*, **16**, 99-115.
- 奥田秀宇 (1994). 恋愛関係における社会的交換過程—公平, 投資, および互恵モデルの検討— 実験社会心理学研究, **34**, 82-91.
- Owen, J., Rhoades, G. K., Stanley, S. M., & Markman, H. J. (2011). The revised commitment inventory: Psychometrics and use with unmarried couples. *Journal of Family Issues*, **32**, 820-841.
- Rhoades, G. K., Stanley, S. M., & Markman, H. J. (2010). Should I stay or should I go? predicting dating relationship stability from four aspects of commitment. *Journal of Family Psychology*, **24**, 543-550.
- Roloff, M. E., Soule, K. P., & Carey, C. M. (2001). Reasons for remaining in a relationship and responses to relational transgression. *Journal of Social and Personal Relationships*, **18**, 362-385.
- Rusbult, C. E. (1980). Commitment and satisfaction in romantic associations: A test of the investment model. *Journal of Experimental Social Psychology*, **16**, 172-186.
- Rusbult, C. E. (1983). A longitudinal test of the investment model: The development (and deterioration) of satisfaction and commitment in heterosexual involvements. *Journal of Personality and Social Psychology*, **45**, 101-117.
- Rusbult, C. E., Martz, J. M., & Agnew, C. R. (1998). The investment model scale: Measuring commitment level, satisfaction level, quality of alternatives and investment size. *Personal Relationship*, **5**, 1567-1577.
- Rusbult, C. E., Olsen, N., Davis, J. L., & Hannon, P. A. (2001). Commitment and relationship maintenance mechanisms. In J. H. Harvey, & A. Wenzel (Eds.), *Close Romantic Relationships*. Mahwah, NJ: Erlbaum. pp. 87-113.
- Rusbult, C. E., & Van Lange, P. A. M. (2003). Interdependence, interaction, and relationships. *Annual Review of Psychology*, **54**, 351-375.
- 相馬敏彦・浦光博 (2009). 親密な関係における特別観が当事者たちの協調的・非協調的志向性に及ぼす影響 実験社会心理学研究, **49**, 1-16.
- Stanley, S. M., & Markman, H. J. (1992). Assessing commitment in personal relationships. *Journal of Marriage and the Family*, **54**, 595-608.
- Sternberg, R. J. (1986). A triangular theory of love. *Psychological Review*, **93**, 113-135.
- Sternberg, R. J. (1997). Construct validation of a triangular love scale. *European Journal of Social Psychology*, **27**, 313-335.
- Strachman, A., & Gable, S. L. (2006). Approach and avoidance relationship commitment. *Motivation and Emotion*, **30**, 117-126.
- Surra, C. A., Hughe, D. K., & Jacquet, S. E. (1999). The development of commitment to marriage: A phenomenological approach. In J. M. Adams, & W. H. Jones (Eds.), *Interpersonal Commitment and Relationship Stability*. New York: Pleum. pp. 125-148.
- 宇都宮博 (2005). 女子青年における不安と両親の夫婦関係に関する認知 : 子どもの目に映る父親と母親の結婚生活コミットメント 教育心理学研究, **53**, 209-219.
- Van Lange, P. A. M., Rusbult, C. E., Drigotas, S. M., Arriaga, X. B., Witcher, B. S., & Cox, C. L. (1997). Willingness to sacrifice in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **72**, 1373-1395.
- 和田 実・山口雅敏 (1999). 恋愛関係における社会的交換モデルの比較:カップル単位の分析 社会心理学研究, **15**, 125-136.
- Wieselquist, J., Rusbult, C. E., Agnew, C. R., & Foster, C. A. (1999). Commitment, pro-relationship behavior, and trust in close relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **77**, 942-966.
- 山岸俊男 (1998). 信頼の構造:こころと社会の進化ゲーム, 東京大学出版.
- 山下倫美・坂田桐子 (2008). 大学生におけるソーシャル・サポートと恋愛関係崩壊からの立ち直りとの関連 教育心理学研究, **56**, 57-71.

## 註

- 1) Stanley & Markman (1992)はモデルの名称を明記していない。Stanley & Markman(1992)のモデルは、コミットメントを二次元に分類していることに特徴があることから、便宜的に“次元モデル”と名付ける。
- 2) Adams & Jones(1999b)は、三側面モデルのモラルコミットメントは、魅力次元や抑止力次元とは異なる独立した次元であるとしている。しかし、Levinger(1999)は、モラルコミットメントは個人内で生じる抑止力であり、抑止力次元として扱うべきものであると主張している。
- 3) 代替関係は現在のパートナーとの関係以外の異性のみ限定されるものではなく、一人で過ごすことや、仕事や趣味などの活動も含まれるものである。多くのモデルは代替関係をこのように扱っているが、バリアーモデルは代替関係を明確に定義していない。しかし、尺度の項目を見ると、恋人以外の異性との関係や恋人がいない状態(single life)を代替関係としている。したがって、バリアーモデルは他のモデルと比べ、代替関係を限定的に捉えていると考えられる。

## The review of commitment in close relationships

Kentaro KOMURA(*Graduate School of Comprehensive Human Sciences, University of Tsukuba*)

Yutaka MATSUI(*Faculty of Human Science, University of Tsukuba*)

The purpose of this article was to review definitions and models of commitment to close relationships. Models of commitment in previous studies suggested four commonalities: the motivation toward maintenance relationships, the foresight or expectation about future state of the relationships, the senses of responsibility or obligation to relationship maintenance and the presence of attraction and constraint. Furthermore, there were two different points: whether or not relationship identity, quality of alternative, and relationship maintenance act are commitment itself, and how attraction and constraint of commitment are treated with. We discussed the appropriateness of models of commitment based on these commonalities and difference points.

Keywords: commitment, relationship maintenance, close relationships.